



解像度を下げる処理をしています

### 「本迷宮 本を巡る不思議な物語」カバージャケットデザイン

2016(平成 28)年 カバージャケットデザイン：世永逸彦 イラストレーション：チップス 共催：日本図書設計家協会、株式会社竹尾 協力：王子エフテックス株式会社、関西美術印刷株式会社、ダイニック株式会社、特殊東海製紙株式会社、日清紡ペーパープロダクツ株式会社、株式会社博勝堂、株式会社村田金箔、リンテック株式会社 / 用紙：ヴァンヌーボ V スノーホワイト 四六判 Y 目 130kg、エアラス スーパーホワイト 四六判 Y 目 120kg、サガン GA プラチナホワイト 四六判 Y 目 130kg / 印刷：オフセット印刷+UV 厚盛り印刷

## The image of countdown of watch ポスター 4連続シリーズ

作品のテーマは機械式腕時計。デジタル時代の昨今、私はアナログの極みの様な存在である機械式腕時計に心惹かれている。機械式腕時計は使用する人の心にある種の安心感を抱かせ、やすらぎを与えてくれる。あの「チクタク、チクタク、、、」の音。ノスタルジックな気分も含めての安らぎを、現代の視覚造形言語へ置き換えて、アナログ機械式時計のイメージ・ポスターの制作を行なった。

その特徴としては、文字盤の文字情報である数字を画面に配置し、時を刻む独特の音をドットの丸で表現。罫線を重ねてゼンマイの表情を造り上げ構成を進めていった。ポスターはデジタル環境（パソコン）の中で制作した。配色は正確に時を刻む象徴として青、少し人間的な機械式時計の情熱を赤で表しその2色をブレンドしている。

指揮者がタクトを振ったかのような曲線、それらもモチーフに加えてコンポジションを探った。ポスター1点1点は格調高いオーケストラの演奏を象徴的に場面場面でイメージを重ね合わせ、構成を練り上げた。ステージ上のスポットライトを浴びるイメージ、場内の照明の光と暗闇、その中で指揮者がリズムを正確に刻み続ける、そんなイメージだ。時を刻む音や音楽がポスターを見る人の心にまで届く様、造形を試みた。このイメージが第三者に伝われば成功、難し顔で腕を組まれてしまえば失敗。デザインの表現はいつもその1点に尽きる。時代を経ても音楽やニューイヤークラッシュのカウントダウンは心躍るものであって欲しい。

コミュニケーションデザインも、万人へ向けられた最大公約数へのアプローチだけではなく、その逆もあってしかるべきだろう。少数でも国境を超えて行けばその数は等しくなるのだ。

## 「本迷宮 本を巡る不思議な物語」 ブックカバー

日本で出版に関わる装丁家や装画家などを結集した団体である日本図書設計家協会が発行する年4回発行の会報誌。それらに寄せられた、現代作家のエッセイ10名分を束めて、協会でその作品集300部を制作。その本に会員による24種の装丁・装画のブックカバーが付加されて、東京神田錦町の竹尾見本帖本店2階で展示、販売されたカヴァージャケット作品。そのひとつがこの作品である。展覧会は雑誌「アエラ」などの各マスメディア等でも大きく取り上げられた。

## 尾道を舞台にした創作民話「尾道草紙」 創刊10周年記念ボックス

尾道市立大学 芸術文化学部 創作民話の会が発行する光原百合教授のゼミ生による創作民話集「尾道草紙」。全10冊を1セットで納めることのできる収納ボックス（2005～2015年）。表紙のイメージは、尾道の千光寺山上空の夜空に、空想の翼を広げ、この町の中を自由に飛び回っている文学好きの若者たちの視点で、尾道の景色をビジュアライズ。広辞苑くらいの重量で過去10冊と別冊1冊が収まっている。200部の限定版。